

エストロゲン,あるいはプロゲステロンレセプター陽性というのは,マスとして把えた平均的性格で,必ずしも同一組織内のすべての癌細胞の性格を示すものではない。

従つて,臨床治療において,レセプター陽性癌が,ホルモン療法で根治すると考えるのは,基本的に誤りである。

癌細胞個々との性格,多様性,それが癌であるという事を忘れてはならないものと考ええる。

追加 (大阪市大) 須川 信

実験的脾癌において,エストロゲンレセプターを認めている報告が数編ある。正常の脾にはないERが癌化によつて出現することは,遺伝の形質発現の変異であつて必ずしも変異細胞がホルモン依存性を持つものではない。レセプターの存在と遺伝子の数値発現とを直結して考えることは,癌において特に慎重でなければならない。

154. 子宮頸癌と HLA 抗原の疾患感受性

(慈恵医大)

横山 志郎, 中本 治, 鶴岡 信博
伊藤 治英, 細川 勉

(北里大・臓器移植科) 柏木 登

目的: 子宮頸癌の発生要因には種々の因子があげられているが,今回我々は免疫遺伝学的因子の関与に注目し,頸癌患者の HLA における疾患感受性の有無を明らかにすることを目的とした。

方法: I 期以上の非血縁子宮頸癌患者46例を対照としたが,組織型分類は全例扁平上皮癌である。なお,健康人対照としては,第8回国際 HLA ワークショップにおける pannel cell 約950例を用いた。HLA の typing は NTH 標準法および Terasaki 法のナイロンウールカラムによる T.B cell 分離法にしたがい,122種の標準血清(第2回アジア・オセアニア HLA ワークショップ抗血清)を用い,56抗原の検定を実施した。

成績: HLA-A 抗原に関しては,患者群では46例中36例(78.3%)に AW24 がみられ,対照群の53.4%に比べ有意に高く出現した。(P<0.01, RR=2.0) HLA-B 抗原に関しては患者群において有意に高く出現する抗原は得られなかった。また,HLA-C 抗原に関しては有意差を示す抗原は患者群において得られなかった。次に HLA-DR 抗原に関しては,患者群では46例中19例[41.3%]に DRW8 が認められ,対照群の6.5%に比べ有意に高く出現した。(P<0.01, RR=10.1) 従つて,子宮頸癌患者では,HLA-A, および DR 抗原の

一部に疾患感受性が認められ,頸癌発生においても,他の疾患感受性を示す疾患の場合と同様に,免疫遺伝学的因子の関与が強く考えられた。

独創点: 子宮頸癌と HLA-A, B, C, および DR の4者の疾患感受性を検討した報告は未だ認められていない。またアジア・オセアニアワークショップの抗血清を用いた報告も初めてである。

質問 (名古屋市大) 片平 智行

① 子宮頸癌の発症年齢について,若年の場合と高齢の場合との疾患感受性の差異を御検討されたでしょうか。

② 子宮体癌についての検討はありますか。

回答 (慈恵医大) 横山 志郎

① 若年型の頸癌患者の HLA 疾患感受性は検討していない。

② 体癌については検討していない。

回答 (北里大・臓器移植) 柏木 登

② 子宮体がんではどうであつたかの質問に対して,EB ウイルス感染者のうちで,鼻咽頭がんは,A2 抗原を持つたものに高頻度に認められる。いつぱう,類似したヘルペスウイルスの感染が子宮頸部にはしばしば起こるので,そのうち,ある特定の HLA 抗原をもつたものが,がんを発症しやすい状況にあるのではないかと推定して,この調査を行つた。という次第で,体がんを今回は対象にしなかった。

155. 子宮頸癌細胞にみられた巨大な直線 fibrillar 状核内封入体について

(群馬大) 大和田信夫, 五十嵐正雄

(群馬大・中検) 永尾 俊弘, 田波 洋

子宮頸癌細胞の核内封入体の電顕的検索を目的とし子宮頸癌患者11例と対照として細胞診,組織診で異常のない者9例よりえられた頸部組織片をグルタルアルデヒド(2.5%, pH7.2)で固定(4°C, 120分)したのち Osmium tetroxide (1%)で固定(4°C, 120分),アルコールで脱水後 Epon812で包埋,超薄切片は酢酸ウラン及び鉛二重染色後 JEM100C 及び JEM 7 型透過型電子顕微鏡にて観察した。

1) 子宮頸癌11例中5例(45.5%),1170細胞中32細胞(2.7%)に細線維束および線維束よりなる核内封入体がみられたが対照非癌9例,948細胞についての観察ではみられなかった。

2) 線維状核内封入体は超微形態的特徴から3種類に分類されたので tentative にそれぞれ a, b, c 型とした。